

特集にあたって

村井友子・小林磨理恵

増し、その収集と保存が加速化していくものと思われる。

②ライブラリアンの役割と図書館間連携

蔵書の構築と管理には、ライブラリアンの役割が欠かせない。ロンドン大学東洋アフリカ研究学院(SOAS)図書館のライブラリアンは、選書はもとより、利用者向け講習会の実施、助成金の獲得、ウェブサイト上のサブジェクト・ガイドの更新、研究成果の出版等といった、担当するコレクションに関わるあらゆる業務に責任を持ち、職務にあたっている(小林富士子)。

オーストラリアの韓国コレクションを統括するライブラリアンは、少人数で大規模なコレクションの構築にあたり、他の図書館に向いて講師を務めるなど、韓国学の進展と文化の普及に貢献すべく熱心に取り組んでいる(二階宏之)。

またライブラリアンは、図書館間の連携協力やリソースシェアリング(図書館情報資源の共有)の実現に向けて活躍している。予算や書架スペースの制約から、他の図書館と連携し、主題を分担して資料収集にあたりたり、複数の図

ンディング・オフィサーを中心に担当部署が慎重に検討している(ジヨセフ・プッチオ)。

また、東南アジアコレクションとしては世界有数のコレクションに数えられる、コーネル大学図書館の「ジョン・M・エクルズ東南アジアコレクション」には、世界各地の資料が様々な方法を駆使して集められている。ペイカー&テイラー社との契約やLCの共同収集プログラムへの参加に加えて、例えばベトナムには北部、中部、南部に各一社取引可能な販売業者を設けるなどして、包括的かつきめ細かな収集に取り組んでいる(グレゴリー・H・グリーン)。

ウェブサイトやポーンデジタル資料の収集は、LCとコーネル大学図書館とに共通して挙げられた課題であり、今後は紙媒体の資料に加えてデジタル資料の重要度が

●はじめに

情報技術とインターネットの進展、学術情報の量的拡大と発信媒体の多様化、学術社会の変容、財政問題などの環境変化により、日本の研究図書館は大きな変革を迫られている。アジア経済研究所図書館(以下、アジ研図書館)は、研究所の発足から今日まで、日本の開発途上国研究を情報面から支える研究図書館として、開発途上国の資料の収集、提供、保存を継続し、近年はデジタル・アーカイブや機関りポジトリの構築による情報発信活動にも力を入れてきた。期待される研究図書館の役割が変容していくなかで、より効果的な図書館サービスを実現していくため、現在、アジ研図書館は、新しい研究図書館像を模索し、図書館将来構想策定に向けた準備を進めている。

本特集は、アジ研図書館を含めた日本の研究図書館の将来像を描いていくうえで、大きな示唆を与えてくれる海外の研究図書館の先進的サービスの事例を、①蔵書構築、②ライブラリアンの役割と図書館間連携、③学術情報の発信という三つのテーマに分けて紹介する。

●海外の実践―各報告の紹介― ①蔵書構築

世界最大規模の蔵書を有する米国議会図書館(LC)は、アプルーバル・プラン(LCの選書基準に基づき販売業者が資料を納品する契約)や六つの海外現地拠点などを効果的に活用し、幅広い分野と地域の資料を包括的に収集している。LCは受け入れた資料に対し永久に保存する責任を負うため、その受け入れの是非はレコメ

書館で所蔵資料を共有したりすることは海外では珍しいことではない。「メルボルのアジア図書館（ALIM）」は、ライブラリアンが立ち上げたオーストラリアのメルボルン大学東アジア図書館とモナシユ大学図書館アジア研究室による連携事業である。ALIMは資料の共同利用と蔵書構築の協力に加え、その活動をウェブサイトで公開したり、ライブラリアンの定例会議を開催して情報交換や活動計画の立案をしたりするなど活発な連携活動を行っている（八田綾子）。

一方、米国のラテンアメリカコレクションを有する研究図書館のライブラリアンは、リソースシェアリングの理念の下に、研究情報の共有と情報発信を多彩な連携協力により実現してきた。図書館間連携に基づくコレクションの電子化やリポジトリの構築、ウェブアーカイビングなどはオンライン上で公開され、米国内に止まらない世界中の研究者の貴重な情報源となっている（村井友子）。

連携のかたちは、ALIMのような同じ地域に位置する図書館間の連携から、距離の離れた海外の図書館とのネットワークまで様々

にある。東南アジア資料を担当するライブラリアン同士がつながり、情報交換する場として、多様な米国内のネットワークや国際的なネットワークが存在する（ヴァージニア・ジンイ・シー）。こうした場合は、図書館間の連携関係を生み出し、よりよいサービスを利用者に提供するための基盤として機能するだろう。

③ 学術情報の発信

今日では、オンラインを通じて情報を発信する図書館の機能は自明のものとなりつつあるが、その規模と内容は各図書館の果たすべき役割と利用者ニーズによって多岐にわたっている。

オーストラリア国立図書館が主導し、州立図書館、地方図書館等が協力した全豪新聞電子化プログラムでは、オーストラリアで発行された六〇〇紙以上の新聞が電子化され、オンライン上に公開された（ヒラリー・ベルソン）。世界中の人々が無料で新聞を閲覧し、さらにその本文を検索することも可能にしたことから、図書館資料の有効活用と情報発信の双方が効果的に実現されたといえる。本プログラムは、図書館間のネットワークとリソースシェアリングが

功を奏した事例でもある。

イギリス開発学図書館（BLDS）は、開発途上国で刊行された調査研究報告書等のいわゆる灰色文献を、発行元の許諾を得た後に電子化し、オープンアクセスリポジトリにて公開している。電子媒体での公開によって、検索の利便化はもとより、開発途上国で生み出された研究成果の認知度の向上が図られており、情報発信を通じて所蔵資料の利用促進に成功している（ヘレン・ライン）。

また、米国の研究図書館ではオーラルヒストリーを伝統的に収集してきたが、近年は語りの音声と書き起こし（トランスクリプト）をウェブサイト上で公開しており、世界中の人々が語り手の声に耳を傾けることができる。図書館におけるオーラルヒストリーの収集は、歴史記録の蓄積の意義と共に、情報発信の役割も担うようになった（小林磨理恵）。

ウェブやSNSなどのニューメディアの発現は、国連のような巨大組織における情報管理・発信の在り方を問い直すことになった。ダグ・ハマーシヨルド図書館では、国連の主要機構が生み出す膨大な情報の収集、管理、普及、保

存を一元的に行い、利用者の信用にたる情報を発信する必要性から、デジタルリポジトリの実装と公開を予定している（ボヤン・グロツダニツク）。

オンラインでの情報発信が主流化する一方、従来図書館が行ってきた図書館内における資料展示は、情報発信と資料の利用促進に有効な手段として現在も重視されている。大英図書館では「プロパガンダ・権力と説得」をテーマに約二〇〇点の国家プロパガンダに関する資料を展示し、閲覧者の関心を集めた（澤田裕子）。ライブラリアンには、様々な手段を駆使して、所蔵資料が最大限活かされる工夫をし続ける努力が求められる。

● これからの日本の研究図書館

限られた予算のなかで、多様化する情報資源を収集し、提供するための新たな機軸を見出すうえで、海外の図書館の実践は示唆に富んでいる。

蔵書構築においては、様々な入手方法を複合的に用いて、安定的かつ包括的な資料の収集を行っている。長期的な視点に立つ蔵書構築を維持するには、蔵書に対する

深い知識を持ち、研究動向や社会情勢、情報資源の変化に造詣の深いサブジェクト・ライブラリアンの存在が必要不可欠になる。海外の研究図書館には、各分野を専門にするサブジェクト・ライブラリアンの存在が深く根付いている。他、本特集では詳しく取り上げられなかったが、図書館システムを専門にするシステム・ライブラリアンや、各種データの管理・提供を専門にするデータ・ライブラリアン等が、それぞれの職域に特化した専門性の高い仕事を行っている。こうした人的資源を養成し、維持する体制の整備は、日本の研究図書館に与えられた喫緊の課題である。

海外の実践から、図書館間の柔軟な連携関係の構築が、利用者サービスの拡充、学術情報の流通促進、研究情報資源の共有化に多大な貢献をしていることが明らかになった。日本においても、総合目録・所在情報サービスによる図書館間相互貸借・複写サービスが確立し、図書館間での資料提供に関わる協力関係が構築されて久しく、近年では、学術機関リポジトリポータルを通じた学術情報の共有化も進められてきた。今後は協

力関係を、レファレンスや情報交換等での人的交流、資料の分担収集、また貴重な研究情報資源の共同での電子化等を通じて、さらに深化、発展させるべきではないだろうか。まずは図書館同士がネットワークを形成し、組織の壁を超えて、資料の分担収集や研究情報資源の保存と活用について検討できる場を創設すること、またそれを維持し続けることが不可欠である。地域研究資料の拠点のひとつであるアジア図書館は、図書館間連携を、日本国内の地域研究情報資源の整備・拡充に資する形で具体化していきたいと考えている。

戦略的な学術情報発信は、今後日本の研究図書館が取り組むべきもうひとつの課題である。本特集で取り上げた海外の事例では、ライブラリアンが情報発信の対象となるコンテンツの資料的価値を見極め、情報発信の先にいるユーザーの利便性も強く意識して、デジタル・アーカイブやリポジトリを構築していた。また、国際標準プロトコルに対応したシステムを採用することにより、グループ・スカラーをはじめとする外部のローバイダーとのメタデータの共有化を容易にし、研究成果の効率的

かつグローバルな発信にも成功していた。日本の研究図書館も機関リポジトリの構築などで実績を上げているが、海外の実践に学ぶべきところは大きい。また、設置母体である大学や研究所で研究成果の普及を担当する部局と協力し、組織全体でのより戦略的な研究成果発信の仕組み作りに関わること、日本の研究図書館の課題として挙げられる。

他方で、日本における学術情報の発信は、海外で日本研究をする研究者・学生にも関係する。海外で日本コレクションを担当するライブラリアンからは、日本国内における日本語資料の電子化や全文データベースの整備の遅れが、海外での日本研究の進展を阻害するとの懸念が示されている。海外で日本研究を行う研究者・学生も重要なユーザーであるとの意識し、電子媒体での学術情報の発信と利便性の高いデータベースの構築を図書館間連携の下で行うべきである。最後に、本特集で取り上げられなかった点を二つ指摘しておきたい。ひとつは、海外の研究図書館には、研究成果物のみならず、研究の過程で生成された研究データを保存・管理する動きがみられる

点である。研究図書館は、従来どおり出版物を収集し、利用に供する役割を保持する一方で、研究過程の保存・管理から研究成果の発信まで、広範にわたる機能を持つことが期待されている。もうひとつは、メインターゲットとなる利用者を明確に意識し、利用者ニーズの分析に基づくサービスを戦略的に行っている点である。カリフォルニア州内の大学で研究活動を行っているアジアの川上桃子、町北朋洋両研究員に、大学図書館の利用経験を寄せてもらったが、図書館を利用する研究者の声を吸い上げ、図書館の運営に反映させる「利用者指向型」の図書館のあり方は、海外の図書館に学ぶべき重要なポイントのひとつであろう。

(むらい) ともこ／アジア経済研究所 図書館、こばやし まりえ／アジア経済研究所 図書館